

韓国社会福祉学会 2021年度秋季共同学術大会での自由研究発表報告

鶴見大学短期大学部
川池 智子

「アジア・フェロシップ」の価値

昨年10月、ソウル大学主催「韓国社会福祉学会」で発表の機会をいただいた。残念ながらリモート発表。もちろん、むしろ、海外発表リモート初体験は緊張もしたが意義深かった。

発表テーマは「"의존 노동(돌봄 노동)"으로서 보육직의 "Fragility" 에 대한 주시-케어 윤리로 해독하는 보육사의 <소리>-("依存労働"としての保育職のフラジリティへの注視-「ケアの倫理」から読み解く保育士の〈声〉)」であった。紙幅の関係上、本発表は、東京都保育士調査報告書の自由記述をキティ(2010)論に依拠して分析したものであり、保育士の「保育と自分の子育て」というケア労働の狭間での葛藤、保護者の子育てを含むと「三つのケア労働の対立構造」がみえたことだけ記しておく。「韓国も同様の問題がある。丹念な分析の続報を待っています(ゲストへの配慮かも)」というコメントをいただいた。

他の韓国人研究者の発表は「covid19以後の社会福祉の価値の観点からの公正の再解釈」、「e-welfare伝達ガバナンスの方向性」であった。前者は若者の就労・経済的不公平に関する新聞記事キーワード分析、後者は韓国の社会福祉サービス提供のITシステムに関する発表であった。

今回の発表で得たものは、よく言われることだがコロナ禍を逆手にとることであった。海外との「オンライン:不可視的ライン」は距離のみならず既成概念のバリアを緩やかに壊すパワーがあるのかもしれないと思った。韓国はオンラインを介した社会福祉サービス提供体制構築をめざしていること、テキストマイニングを用いた研究方法が模索されていることも学んだ。

日本の学会では減多に経験できない韓国的ディベートも刺激的であった。前回の発表も同様であり、それが今回の参加の動機ともなった。まさに期待通り、海外発表の醍醐味を味わった。

最後に無理を承知で、いくつか希望を書く。

まず、隣接領域の学会のように、採択された研究には翻訳、通訳、渡航旅費の支援を検討してほしい。そうすれば、優れた研究があってもハングルや中国語ができない人、旅費が負担の人も参加できる。いま、経済的余裕がないのは若い院生だけではない。退職後の研究者も「熟成した研究」発表のチャンスを得ることができる。二つ目は、「リモート」であれば研究発表の機会を増やしてほしいということである。量は質を凌駕することもある。三番目は、これもよく言われてきたことだが、もう欧米だけから学ぶ時代は過ぎた。当学会において経験させていただいた3回の発表、韓国社会福祉学会2回、東アジア社会福祉フォーラム(成都市)を通して、近隣のアジアの研究者と学びあう価値に気づいた。成都との縁は、もうすぐ中日の研究者で編む『洞察日本社会福祉の动向与未来:亚洲福利国家的典范及比较研究的启示』(国立西南交通大学 国际老龄科学研究院出版)として実る。

コロナ禍は、異国に身をおき五感で感じ対面で学びあうことの価値の「再発見」でもあった。

「本場のチキン」「本場の火鍋」を楽しみながら研究論議に花を咲かせる日々が待ち遠しい。

文献:Kittay, Eva Feder. Love's labor : essays on women, equality, and dependency. Routledge, 1999. 2nd. 2020. (=2010, 岡野八代ら監訳『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』白澤社.)